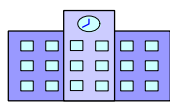


学校だより第11号 令和2年2月3日(月)

学校教育目標：自ら学び、心豊かでたくましい児童の育成



きざき



さいたま市立木崎小学校

— 児童が目を輝かせて、

明日の授業を楽しみにする学校 —

TEL048-831-2281

URL <http://kizaki-e.saitama-city.ed.jp/>

E-Mail kizaki-e@saitama-city.ed.jp



未来を切り拓く“突破力”

校長 豊島 登

インフルエンザの流行がまだまだ心配ではありますが、休み時間の校庭は元気に走り回って遊ぶ子どもたちでいっぱいです。少しぐらいの病気に負けない丈夫な体をつくってほしいです。

さて、スポーツが大好きな私は、自分で行うことはもちろん、観戦すること、映画や漫画、小説、雑誌などを見たり読んだりすることも多いです。先日、新聞を読んでいて、日本大学教授、先崎彰容氏の「五輪の年に思う自ら切り拓く力」という論説（1月22日付産経新聞）が目にとまりました。少し長くなりますが、要約してみます。

大学のトレーニングジムで働く若い女性がいた。一見してアスリートであることがわかる。彼女は北海道の出身で陸上競技に出会い、インターハイでの好成績をきっかけにこの道で生きていきたいと思うようになった。大学は3校から特待生扱いでの誘いを受け、大阪での大学生活を選んだ。卒業後、北陸地方の学校教師になりながら競技生活を続けた。両親からは陸上では到底「飯を食えない」と、競技生活自体を反対されていた。しかし、地方教員としてこのまま終わることに疑問をもち、「2020東京五輪まで」と期限を切って競技だけに集中したいと考えた。自分がこれだと決めた世界で、やり切ったと思うまで競技をすれば、その後教師になったとしても、必ずその経験は役立つだろうと。ジムトレーナーだけでは食べていけないので、アルバイトの掛け持ちもした。しかしそれでは体がもたない。そこで彼女はスポンサー探しをしようと決断する。だがどうしたらよいかまるでわからない。だから、まずはスポンサーの探し方を教えてくれる人を探した。そのノウハウを生かして窮状を訴えると、数人のスポンサーが不思議と現れ、遠征費用などを支援してくれることになった。おかげで今では、トレーナーの仕事と競技に集中することができる。あと数カ月、オリンピック出場の当落線上にあるのだから、人生の全てをかけてみたい。

先崎教授は彼女の努力に感動しただけでなく、「その『突破力』、自らの道を自分の手で切り拓く姿に心動かされた」と述べています。新天地を求めて活動場所を転々としながらも、常に現状を打開するために必要なことを考え、それを実践に結び付けようと行動するその姿は、まさにこれからの人材に求められるものだと思います。「自分には無理だ」「できない」と思った途端に、自分で自分の限界に線を引いて安全圏に閉じこもることになるのです。私自身の経験からも、人生には自分の殻を破る瞬間が何度かあるように感じます。思考力、判断力、表現力を育てることは、いつか発揮される“突破力”を磨くことにつながります。それを支援できる教員であり学校でありたいと思います。